

機関番号：23702  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2010  
 課題番号：19791742  
 研究課題名（和文） 精神科 new long stay 患者を対象とする退院支援プログラムの開発  
 研究課題名（英文） Development of a discharge nursing program for new long stay patients in psychiatric hospital  
 研究代表者  
 石川 かおり（岐阜県立看護大学・看護学部・准教授）  
 研究者番号：50282463

## 研究成果の概要（和文）：

退院支援看護プログラムは、「患者へのアプローチ」、「多専門職チームへのアプローチ」、「家族・身近な支援者へのアプローチ」のほか、退院支援に取り組もうとする看護師個人に向けた「看護する私自身へのアプローチ」、新しい精神科病棟の文化や風土を創造するための提言を含む「組織へのアプローチ」の5つの柱から構成される。このプログラムの臨床での活用により、長期入院を余儀なくされている方々の退院促進と地域ケアを推進する一助となることが期待できる。

## 研究成果の概要（英文）：

The discharge nursing program developed through this research was consisted of five elements: approach for patients, approach for professional team members, approach for family/people who close to patients, approach for myself (nurse), and approach for organization/system. Through applying the program in clinical practice, it is hoped that community care for long term inpatients will be promoted.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,500,000	540,000	3,040,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：精神看護学，長期入院，ニューロングステイ，退院支援

## 1. 研究開始当初の背景

精神障害者のケアは地域ケア中心型へと転換しつつあり、新規入院患者の入院期間の短期化が進んでいる。一方で、入院期間1年以上の患者の動態には大きな変化は見られず、長期入院患者の退院支援は看護において

も重要な課題の一つであった。特に、入院期間1年から5年の患者を更なる超長期入院患者にしないために支援する必要があると考えられるが、これらの患者に焦点を当てた調査研究は行われていなかった。そのため、まずは退院支援の実態と課題を患者の視点と

看護師の視点の双方から明らかにし、有用な看護の方法を確立することが必要であった。

## 2. 研究の目的

精神科入院期間1年から5年の患者を対象とした退院支援の実態と課題について患者と看護師双方の視点から明らかにし、これらの患者を対象とした退院支援看護プログラムを開発することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1)平成19年度

退院支援の課題とニーズを明らかにすることを目的として、精神科医療施設に1年から5年入院している患者7名を対象とした聞き取り調査を実施した。データは質的に分析し、退院支援の状況も含む患者の入院生活の実態を構造的に明らかにした。

### (2)平成20年度

退院支援の状況について患者の視点から明らかにすることを目的として、(1)の成果および関連先行研究結果を基に作成したアンケートを用いて、300名の入院患者(入院期間1～5年)を対象に調査した。

### (3)平成21年度

看護専門職の視点から入院期間1～5年の患者の退院支援の現状と課題を明らかにすることを目的として、看護師7名を対象とした聞き取り調査を実施した。データは質的に分析し、看護師の捉える退院支援上の課題と対処を構造的に明らかにした。

### (4)平成22年度

上記(1)～(3)の研究結果を再度検討すると共に、これらの結果を統合して退院支援看護プログラムの試案を考案した。試案の作成過程においては、臨床の看護師等と意見を行い、修正を加えながら洗練を重ねた。

## 4. 研究成果

(1)平成19年度の入院期間1～5年の患者を対象とした聞き取り調査では、以下のことが明らかとなった。入院期間1～5年の患者は、【長期入院システムの取り込み】を基軸として、「長期入院生活に伴う収穫」と「長期入院生活に伴う受難」を体験していた。そして、長期入院生活とは乖離した「退院と‘ふつう’の暮らしを希求」して、その希望にそって退院支援が進められる中で、「退院準備状態」と「退院準備不足状態」が同時に生じていた。このような退院準備状況のアンバランスな状態は、患者のなかに「退院に向けた心的葛藤」を引

き起こし、この葛藤状態を解消するために、患者は「葛藤状況への構え」をとっていた。

これらから、看護への示唆として、適応しているように見える裏側にある患者の苦悩や苦痛をアセスメントし緩和すること、言語化されない患者の希望を推し量りながら言語化できない理由を探索する、これまでの患者－看護師関係を真摯に見直すこと、患者のストレングスに着目した手厚いケアを提供すること等が挙げられた。

(2)平成20年度の入院期間1～5年の患者を対象としたアンケート調査では、以下のことが明らかになった。142名から回答を得(回収率47.3%)、回答者記載による入院期間が1～5年未満である103部を有効回答とした(有効回答率72.5%)。回答者は、男性53%、女性47%、20-30代19%、40-50代60%、60-70代21%、統合失調症が73%を占め、平均入院期間は27.8月であった。主たる統計結果は、退院に対する考えでは85%が退院を考慮し、82%が退院を希望し、68%が退院可能としていた。②退院準備状況では、退院時期未確定/不明が82%、退院先未確定/不明が49%であった。また、退院後の心配の上位は、対人関係45%、金銭管理41%などであった(複数回答)。③退院支援状況では、31%が適切な支援が行われているとし、26%が自分の意向や希望が尊重されていると回答した。相談相手の上位は、主治医52%、受け持ち看護師49%、支援者の上位は、看護師44%、PSW39%であった(複数回答)。現在受けている支援内容の上位は、家族調整40%、退院の話し合い39%であった(複数回答)。検定の結果、有意水準 $p < 0.05$ で関連がみられた主なものは、「退院考慮」-「相談相手：受け持ち看護師」( $p=0.033$ )、「退院考慮」-「支援者：看護師」( $p=0.012$ )、「退院希望」-「支援者：看護師」( $p=0.012$ )であった。

これらから、8割以上の者が退院を希望し、7割近くが退院可能と自己評価していたが、大多数は退院の目処は立っておらず、本人の意向と現状とのギャップが示された。また、入院期間1～5年の患者の退院考慮と退院希望には、退院について相談ができ支援してくれる看護師の存在が重要である可能性が示唆された。

(3)平成21年度の看護師を対象とした聞き取り調査では、以下のことが明らかとなった。

### ①退院支援上の困難

入院1～5年の患者の<安定=変化なし>という状況を中心に、<存在感のない患者><長期入院に対する違和感の薄れ><看護チーム全体のモチベーションが高まら

ない><退院支援における看護は未確立>が相互に関連し、退院支援における看護の停滞状態が続く『看護の慢性化』が生じていた。また、看護師、医師、患者、家族の<諦観><予期的不安>が、<家族の抵抗><医療者の抵抗><患者の躊躇い><私の躊躇い>を引き起こし、退院という『変化への抵抗』が生じていた。さらに<病棟内のヒエラルヒー><閉じている病院><収容主義の後遺症><看護体制の限界>が示す精神科医療現場特有のかつてのシステムや文化に付随する『旧態依然とした慢性期病棟の風土』が背景要因として影響していた。これらは退院支援の流れを阻む要因となり、看護師が<退院してもらいたい>と願う<退院の可能性を査定>する『退院支援の萌芽』は、<関係者と接点がない><意見の相違・対立>に遭遇する『退院支援の袋小路』に帰結していた。そして『退院支援の袋小路』は更なる『看護の慢性化』『変化への抵抗』を招き、負の循環が生じていた。

#### ②退院支援上の看護（対処）

困難の一方で、看護師は、意向や希望など患者の声を聴く姿勢をもって『患者の意思を確認・尊重』し、看護計画の立案から実施まで『患者と共に取り組む退院支援』を試みていた。また、退院の目処が立っていなくても現状を踏まえた上で『退院をイメージしてできることから』始めていた。同時に、問題志向や先入観を排除するなどこれまでの『見方を変えて新しい可能性を探求』していた。そして、患者を含むチーム全体が安心して退院支援に取り組めるように、看護師自身も無理をせず長期的な視野を持って『焦らず段階的なすすめ方』を意識し、『安心して失敗できる土壌』を作ろうとしていた。看護師は、チームで退院支援に取り組むことを意識し、まずは患者を含む関係者に対し自分自身の『退院に向けて支える信念の宣言』をし、支援プロセスのなかで対立や齟齬が生じた相手に対しては声をかけ妥協点を探るなど『看護師からの歩み寄り』を試みていた。また、ささやかな変化や気づきを共有することで『看護チームの建設的な雰囲気作り』を行い、チーム全体のモチベーションを高める努力をしていた。さらに、退院支援委員会の設置や事前の根回しなど『組織的に退院支援に取り組む仕組み』を構築するための活動を行っていた。これらの試みによって、患者、家族、看護チーム、医師などに生じた『変化の兆しを退院支援の糧として評価』していた。

(4) 平成19年度～21年度の成果を踏まえて、退院支援看護プログラム試案を考案した。

研究開始当初は、主には患者に対する直接的なケアを想定していたが、患者対象のアプローチだけではニューロングステイ患者の退院支援を促進することは難しいことが明らかとなった。試案は、対象患者に対する「患者さんへのアプローチ」、患者の支援に携わる看護師チーム、医師、精神保健福祉士、作業療法士、保健師、訪問看護師等に対する「多専門職チームへのアプローチ」、ご家族や患者のサポーターとなり得る方々に対する「ご家族・身近な支援者へのアプローチ」、退院支援に取り組む看護師個人に向けた「看護する私自身へのアプローチ」、新しい精神科病棟の文化や風土を創造するための提言を含む「組織へのアプローチ」の5つの柱から構成される。なお、今後は、臨床での実施結果を継続的に評価しながら改訂していく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

石川かおり：精神科ニューロングステイ患者の入院生活の体験。岐阜県立看護大学紀要、査読有、11(1)、13-24、2011。

葛谷玲子、石川かおり、丸茂さつき：精神科長期入院患者の退院に関連する国内看護研究の検討—新障害者プラン後に焦点を当てて—。岐阜県立看護大学紀要、査読有、11(1)、3-12、2011。

〔学会発表〕(計7件)

石川かおり、葛谷玲子、丸茂さつき：精神科入院期間1～5年の患者への退院支援における看護師の体験(第1報)—退院支援上の困難—。日本看護科学学会第30回学術集会、2010年12月3、4日、札幌

石川かおり、丸茂さつき、葛谷玲子：精神科入院期間1～5年の患者への退院支援における看護師の体験(第2報)—退院支援上の方略—。日本看護科学学会第30回学術集会、2010年12月3、4日、札幌

石川かおり、岩崎弥生、小宮浩美ほか2名：精神科長期入院患者の退院支援の状況—入院期間1～5年未満の患者を対象としたアンケート調査—。日本看護科学学会第29回学術集会、2009年11月27、28日、千葉

Kaori ISHIKAWA, Yayoi IWASAKI ほか3名：  
The Recuperation Life of  
“New-Long-Stay” Patients with Mental  
illness towards Their Transfer to  
Community Life: from the Patient’s

points of view , 2009 Shanghai  
International Conference & Exhibition  
on Nursing, 2009 年 11 月 17-20 日, 上海

[その他]

ホームページ等

<http://www.gifu-cn.ac.jp/information/kiyo1101.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石川 かおり (岐阜県立看護大学・看護学部)

研究者番号 : 5 0 2 8 2 4 6 3

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号 :

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号 :

### (4) 研究協力者

<平成 19・20 年度>

岩崎弥生 (千葉大学・大学院・看護学研究科)

研究者番号 : 6 0 2 3 2 6 6 7

小宮 (大屋) 浩美 (千葉大学・大学院・看護学研究科)

研究者番号 : 1 0 3 1 5 8 5 6

<平成 21・22 年度>

葛谷玲子 (岐阜県立看護大学・看護学部)

研究者番号 : 3 0 5 9 8 9 1 7

<平成 22 年度>

丸茂さつき (岐阜県立看護大学・看護学部)

研究者番号 : 0 0 5 9 8 9 1 4